



伝統の城壁と現代生活が同居する吉慶園

## じょうさい 城塞村を見守り続けた鉄の扉

摩天楼。誰もが抱く香港のイメージ。しかし、上空から香港全域を鳥瞰すると、中国国境に近い新界地区には一面の農村風景が広がっている。

その中に吉慶園<sup>ギンヘンウヰン</sup>という集落がある。ここでは、客家<sup>ハッカ</sup>の一族が独自の伝統を維持しながら今日まで500余年の生活を続けている。

客家とは、もともと黄河流域に住んでいた漢民族のうち、度重なる戦乱を逃れて南下し、中国南部や東南アジアに移り住んだ人たちとその子孫を指す。独自の言語や文化を守り、同族間の強い人的ネットワークを通じて政治やビジネスの世界で成功した者が多いことで知られている。

吉慶園の広さは100メートル四方。敷地はレンガ壁で囲われ、壁には鉄砲用の穴、四隅には櫓<sup>やぐら</sup>が配置され、小さな城塞村を形成している。外部との唯一の出入り口は、西側に開いた幅1メートルほどの門。その門には、観音開きの鉄扉が取り付けられている。

この鉄扉、紐<sup>ひも</sup>をよじったような網目模様で、城壁

の威圧感とは対照的に、扉が開いている日中はその存在すら気に留まらない。しかし近代、この鉄扉が脚光を浴びる事件が起こった。

1899年、前年から始まった英国の租借に対して吉慶園の住民は激しく抵抗していた。英国軍はリーダーを捕まえようと城壁に迫るが、住民は門をピタリと閉ざして対抗。ついに、英国軍はレンガ壁に向けた砲撃に踏み切った。鉄扉はこじ開けられ、吉慶園は抵抗の甲斐なく陥落した。その後、鉄扉は英国軍によって取り外され、戦利品として本国に持ち去られてしまった。

しかし、客家一族は、簡単には屈しなかった。一族はこの伝統ある鉄扉の返還を英国政府に訴え続けた。そして、約四半世紀後の1925年、ようやく鉄扉は英国から返還され、元の場所に再び収まることとなったのである。この事件は、客家一族の権力に屈しない勇気ある行動として、当時多くの香港人から称えられた。

日本でいえば、ちょうど戦国武將が割拠していた時代に造られた城壁と門。その中で現代的な生活を送るのは少し窮屈かもしれない。しかし、この城塞村を、修理を重ねながら次世代に伝えていこうとするひたむきな姿に、客家の伝統へのこだわりが感じられる。

(日本銀行香港事務所)



歴史を物語る鉄の扉



客家